

健康まちづくりを目指す地区のマネジメントと市域への展開の方向性

関西大学大学院 学生会員 ○北村 良太
 関西大学 正会員 北詰 恵一
 関西大学 学生会員 小西 季衣

1. 研究の背景と目的

近年、複数街区や共通特性を持つ地区などの空間単位でその特性を活かしたまちづくりが指向され、エリアマネジメントに代表される具体的な取り組みが進められている。市域全体の画一的なまちづくりへの反省や地区間競争の激化への対応という背景から進められるこれらの取り組みは、その性質上、明確にしたエリア内に重点が置かれる¹⁾。しかし、まちづくりの観点からすれば、そこで向上させた地域の価値は、市域あるいはさらなる広域へと展開させたい。ただ、その展開方法については、必ずしも計画論として定まっているわけではない。一方で、まちづくりのコンセプトとして「健康」をキーワードにする例が増えてきた²⁾。健康は、日常の生活に密着した地区固有の要素を含むものであると同時に、多くの市民共通の関心事である。企業や行政の社会福祉負担の軽減にも繋がる分野横断的な課題でもある。

このような背景から、健康まちづくりを、日常生活シーンを支える地区を拠点としつつ、その地区で得られた効果を市域全体に広げていくべきテーマの1つであると考え、その方向性を整理することを本研究の目的とする。具体的な対象地域としては、現在、健康をキーワードとしたまちづくりが進められている大阪府吹田市の北大阪健康医療都市をとりあげる。

2. 地区の開発手法と価値の広域化

代表的な手法であるエリアマネジメントは、「地域における良好な環境や地域の価値を維持・向上させるための、住民、事業主、地権者等による主体的な取り組み」と定義されている¹⁾。個々のステークホルダーの主体性を要件とすることから、市全体のまちづくり効果を必ずしも明示的には想定しているわけではない。一方で、その地区を行き来する人は、市域全体やさらなる広域を活動圏とすることから、その効果の空間的

分野的波及が期待される。また、エリアマネジメントは、大手町・丸の内・有楽町地区のように自ずと広域展開が期待できる大規模開発以外にも、コモンシティ星田や高松丸亀町商店街のような比較的小さな規模のものも見られるようになり、その効果波及をまちづくり計画として意識する必要があると考えられる。

3. 健康まちづくりの広域展開の可能性

健康をキーワードとしたまちづくりは、次のような特徴がある。

- ① 市民の関心が高く、市民の活動で広がることが期待できる。内閣府が平成26年度に実施した国民生活に関する世論調査でも、40～50%が自分あるいは家族の健康に関する悩みがあると回答している。健康寿命を伸ばす活動は、多くの自治体の市民活動をベースにしたまちづくりの課題となっている。
- ② 土地条件に影響され、特に地域特性を反映する必要がある。気候や風土などの広域地域特性だけでなく、微地形の違いによる高低差、まちの成り立ちの違いによる歩道・自転車道整備や公共交通アクセス状況など、地区単位での土地条件の違いが影響する。さらに、商業施設や公共施設の分布状況は、「歩いて暮らせるまち」を進める上で重要な要素となる。
- ③ 公園や公共施設とそれらを結ぶ散策路等のネットワークを効果的に使う事で広域性を期待できる。地区の価値の広域化方策としては、地区別に個性ある取り組みを進め、それらをネットワークで結ぶ手法が通常行われる。近年、その内容が見直されつつある公園・広場や統廃合・複合機能化が進む公民館・図書館などの地域公共施設などの点としての取り組みを進めるとともに、魅力ある散策路や散歩ルートを整備し、実際に市民に歩いてもらうイベント等の線としての取り組みを通して、それらの効果を展開していくことが求められている。

キーワード エリアマネジメント、健康まちづくり、歩いて暮らせるまち

連絡先：〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35

E-mail: kitazume@kansai-u.ac.jp

4. 北大阪健康医療都市の広域展開の方向性

吹田市・摂津市にまたがる北大阪健康医療都市は、図1に示すように、国立循環器病研究センターと吹田市民病院の移転を契機とする健康をコンセプトとした地区開発である。「緑のふれあい交流創生ゾーン」等の公園と「緑の遊歩道」整備をベースにして健康をキーワードとした具体的な取り組みが行われる予定である。

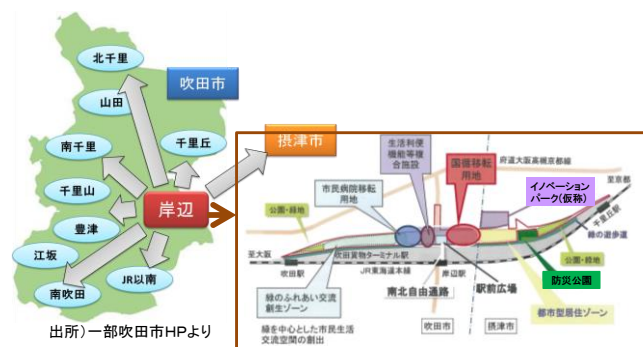


図1 北大阪健康医療都市と市域への展開

小西ら³⁾は、本市域内を日常歩くときに楽しさに影響を与える土地条件を地区別に評価した結果、標高差、歩道整備状況、緑地比率、多様性の4つが主要な要素となることを指摘した。北部丘陵地と南部の標高差の違いでは、同じ日常の買い物行動においても、高低差が大きく異なり、健康への効果が異なる。ニュータウンとして整備された地区と旧来からの市街地では歩道整備状況が異なることから楽しさへの評価が異なることとなる。一方で、市内では、公園・広場や古民家・神社仏閣のリスト化および古木・旧跡などの再発見などを進め、市の取り組みとしての「ぷらっと吹田」、にぎわい観光協会による観光情報誌での「散歩ルート紹介」、「あルック吹田」およびボランティア組織による「まち案内人」などの取り組みがあり、散策を目的としたルート設定やイベントなどが行われている。健康面では、「すいたマチなか保健室」が実施され、身近な店舗等で健康相談が可能な取り組みが、市主導にて実施されている。市内では、コンビニエンスストアと商店街が連携したコミュニティスペースと健康相談の端末整備が進められた事例も見受けられる。

これらの取り組みを踏まえた広域展開の方向性を表1にまとめた。ただし、これらを実施していくにあたって、次にまとめられるような課題も存在する。市民主導に拘わらず、官民産学が一体となった取り組みが必要である。

表1 北大阪健康医療都市の広域展開の方向性

発展段階	エリアマネジメント	周辺地域としての周辺地域	市域全体
先進的な取り組み	・医療機関の立地、オープン化 ・健康づくりと医療の連携事業 ・企業による医療・健康プロジェクト	・住民のまちづくりへの積極的参加によるプロジェクト提案	・地域の特性を活かした公園・施設などの健康をコンセプトとした拠点整備 ・健康をテーマとしたまちづくりイベント
きっかけとしての先進事例体験	・健康づくりのイベント 行政/医療/企業/市民 ・医療関係者・保健士による健康相談 ・蓄積された健康データの医療活用	・地区の公園や遊歩道における体験プログラム ・緑道や公園維持への住民参加	・体験プログラム ・歩き方訓練 ・食の体験
広域的な活動展開	・情報システムによる健康データ整備 ・地域包括システムへの展開	・エリアが出発点のアクションプログラム ルート設定/地域施設との連携 /地区グループとの協働	・拠点の整備と連携 公共施設/商業施設/教育機関 複合利用/指定/支援・補助 ・地区を結ぶネットワーク事業 ルート化/連携協定/情報ネットワーク

① 公園、公民館・コミュニティセンターなどの柔軟な機能展開：単に健康・運動器具を置いただけの公園、画一的な健康相談だけが可能な公民館、あるいは歩いて楽しむ人のための拠点となるサービスを備えていないセンターなどのままでは、健康まちづくりの広域展開のノードとはなり得ない。市および市民が協働して、健康まちづくりの観点からの機能化を図る必要がある。

② 商業施設・医療施設のネットワークへの参画：日常の代表的な行動である買物の拠点としての商業施設に参画を促すとともに、医療施設をよりオープンにして未病あるいは健康な人への関心を高める参加体制を整備する必要がある。

③ 健康データのクラウド化、カルテとの連動、健康・医療相談への連携、取り組み参画促進事業などを進めて、エビデンスベースでの活動実績を挙げる必要がある。これは、エリアマネジメントの価値向上の具体化や行政政策評価に繋がるものでもある。

近年盛んな健康まちづくりは、エリアから地区さらに市域へというボトムアップ型のまちづくりの有効な事例として機能する可能性を有している。個々の取り組みが、広域的にも分野総合的にも、また、今回は触れなかったが将来デザインにも、それぞれ繋がったものとして計画体系が構築できることが強く望まれる。

なお、本研究は、関西大学先端科学技術推進機構における「エコメディカルな社会システム構築研究グループ（代表：北詰恵一）」研究の一環として行ったものである。ここに記し、謝意を表したい。

参考文献

- 1) 国土交通省 土地・水資源局土地政策課 監修：「街を育てる」エリアマネジメント推進マニュアル、2008.
- 2) つくばウェルネスリサーチ：「Smart Wellness City スマートウェルネスシティ 健康づくりは「まち」づくりから.
- 3) 小西季衣・北詰恵一：日常の「歩く」ことを支える健康まちづくりのための地域別評価、土木学会関西支部年次学術講演会講演概要集，CDROM，2016.